

長野県上高井郡高山村藤沢焼について

安藤 裕・松本 義信

* 筑波大学菅平高原実験センター

** 高山村教育委員会藤沢焼特別調査員
高山小学校教諭

| | | |
|----|------------------|--------------|
| 目次 | まえがき | IV 藤沢焼の種類と特色 |
| | I 藤沢焼窯跡発見と発掘 | V 藤沢窯の経営と人物 |
| | II 藤沢焼で使用した粘土と陶石 | VI 窯跡の埋戻し |
| | III 三俣石の化学成分 | 参考文献 |

まえがき

信州には江戸中期から明治にかけて30余に上る窯があり、それぞれの地域の需要に応えて焼き物を生産していた。これらの信州諸窯の概観に就ては末尾に掲げた文献の(1)～(3)を参照されたい。

この時作られた信州の焼き物は殆どのが陶器で、磁器を焼いた窯は数える程しかなく、生産量も僅かなものであったらしい。

これは陶石に恵まれない信州としては当然のことであり、また、磁器製造技術の導入が数少ない藩窯を除き、野の窯に近い信州諸窯としては、負担が重すぎたからであろう。

今日までの調査で判明している県下の磁器を焼いた窯は次の通りである。

〔北信地区〕

1. 須坂市 吉向焼 須坂藩窯 江戸末期
2. 須坂市 須坂焼 江戸末期
3. 高山村 藤沢焼 江戸末期
4. 長野市 善光寺焼 明治

〔東信地区〕

5. 軽井沢町 三笠焼、浅間焼 明治一昭和初年

〔南信地区〕

6. 高遠町 高遠焼 江戸末期
7. 飯田市 風越焼 江戸末期
8. 飯田市 長姫焼 明治

これら以外に、飯田市の久米焼にも磁器のものがあるというが、安藤は確認していない。

前記8窯の内、高遠焼の磁器は生地を瀬戸(?)から入れて、管描きの絵付だけをしたものである。藩窯であった吉向焼と風越焼は、精良な陶石を用いた格調高いもので、瀬戸の陶石を使用したものと考えられている。この他の窯の場合も、材料の陶石は信州以外から移入されたものらしく、純然たる信州産の磁器として分っているのは善光寺焼とこの報告で述べる藤沢焼

のみである。この窯は当時の文化、経済の交流等を知る上からも、貴重な研究対象といえる。また且て、長野市安茂里に疎開していた陶芸家内島北朗氏も藤沢焼に強い関心をもち、当時ラジオを通じて「信濃の焼き物 藤沢焼」を紹介しているが、この焼物の研究は手づかずであった。

I 藤沢焼窯跡発見と発掘

幕末に長野県上高井郡高山村大字奥山田閑場の藤沢地籍で、藤沢焼と称する磁器が焼かれ、その製品の一部が現存している。しかし、最近まで窯の所在、構造、生産年代、陶工等不明なことが多く幻の焼き物といわれていた（図1）。

この窯跡が発見されたのは昭和51年5月2日のことで、松本孝夫氏と、松本の手によって約120年間地下に眠っていた藤沢焼窯跡が明るみに出されたのである。

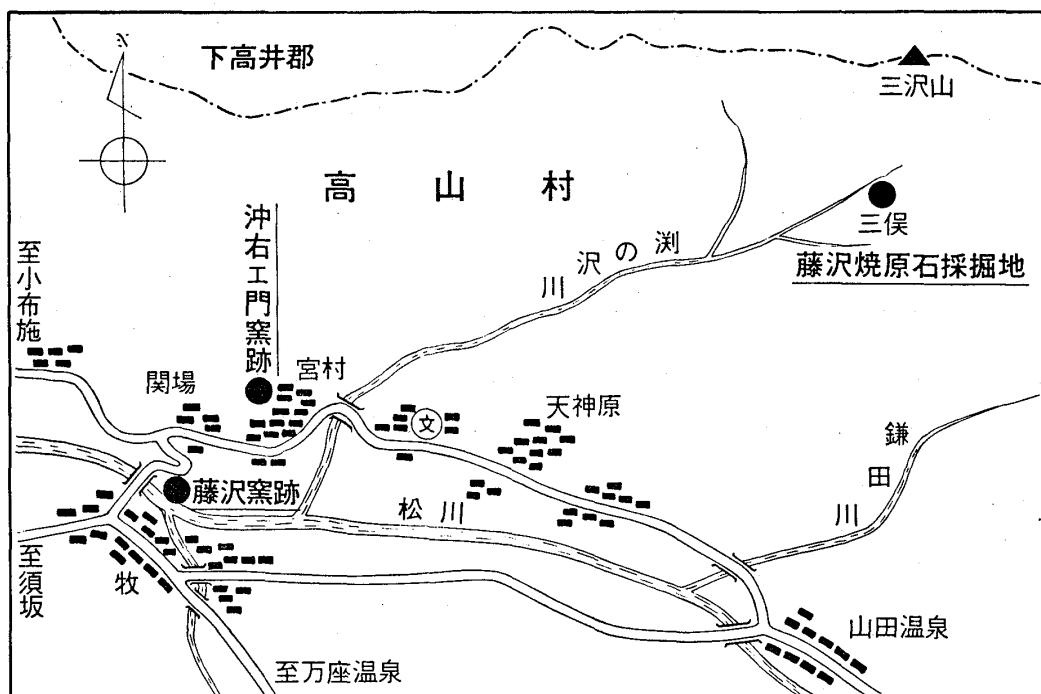


図1 藤沢焼関係地図

この発見により高山村教育委員会は昭和55年7月30日から8月3日まで、窯跡の発掘調査を計画し、田中政義教育長ほか村内外の有志延べ約200人が参加して発掘を行なった。

1. 窯の構造 発掘調査の結果、藤沢窯は縦狭間式連房登り窯であることが分った。規模は胴木間、それに続く3房の焼成室（この三つの房をつなぐ火導が狭間で、これが縦にできているので縦狭間式という）、更に、その上の2房は火煙を集め煙突につなぐ部分で、この中で素焼を行ない、すて窯と呼ばれる部分である。窯は約25度の斜面に築かれており、長さ約9m、最大巾は約4mである。胴木間と第一焼成室をつなぐ狭間は五つあり上部にいくに従い、一つずつ増え、末広がりとなり熱効率を高めている。この様子を図2と写真1に示した。

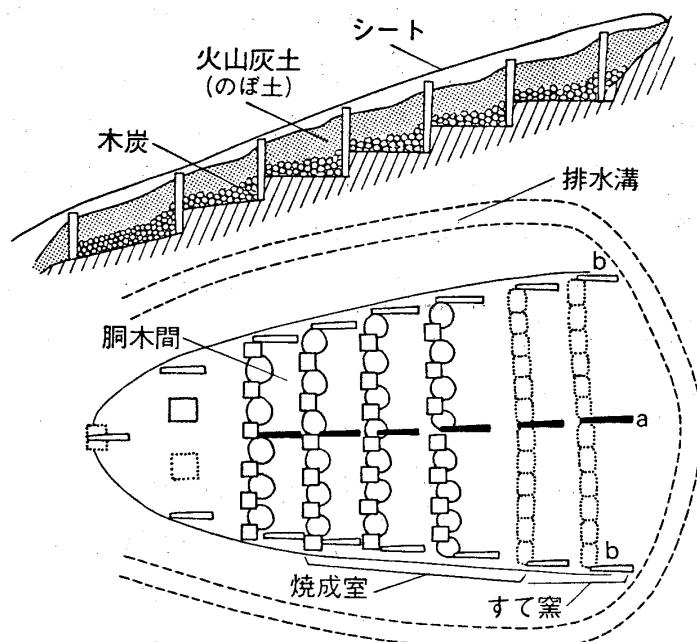


図2 藤沢焼窯跡の構造と埋戻し法を示す

上 断面図（埋戻したもの）

下 平面図 a赤ビニール管、b青ビニール管、排水溝は埋戻しのために掘ったもの



写真1 藤沢焼窯跡、よく保存された窯の構造が見られる

2. 窯焚きの状況 窯跡の焼け込みの程度、焼けただれた狭間の状態から推測し、窯焚の回数は年2回、継続期間は数年かと思われる。窯の規模からみて1回の焼成に松薪800～1,000束を必要とし、昼夜兼行で数日間焚き続け、磁器焼成に必要な1,300°Cに近い高温を得たようである。

II 藤沢焼で使用した粘土と陶石

築窯用練瓦と焼成用サヤには高山村宮村（図1）の赤土粘土を使用している（後述、沖右衛門窯）。

製品用の陶石は奥山田の三俣地籍に産する三俣石を松川の水車まで運び、石臼で粉碎したものに、山田温泉下の松川の段丘上にある池^{いけんてら}平から採掘した白土を混合して使用している(図1)。この池平の採掘地は慶応2年の山崩れで埋まり、現在はその位置の確認はできていない。なお、牧和彦氏(須坂市)所蔵の藤沢焼盃台の高台に「以山田三俣山石造之、於藤沢製之」と刻まれていることは、藤沢焼関係の重要な資料である。

宮村に残る文書に紬葉調合に就いて記されたものがあり、それによると、上記の三俣石に木灰を混合したものを使用している。

III 三俣石の化学成分

藤沢焼陶石(原石)の三俣石と藤沢焼茶碗破片の分析結果は次の通りである。

| | 珪酸 SiO ₂ | アルミナ AL ₂ O ₃ | 酸化鉄 Fe ₂ O ₃ |
|-------|---------------------|-------------------------------------|------------------------------------|
| 三俣石 | 84.40% | 13.25% | 0.60% |
| 藤沢焼茶碗 | 79.36% | 14.90% | 0.95% |

この表が示す通り、三俣石の主成分は珪酸で、それにアルミナと僅量の酸化鉄が含まれている。また、藤沢焼茶碗も三俣石に近い結果になっている。

更に、三俣石の焼成実験に就て述べると、100%三俣石で作った試料の盃は、加熱を続けると1,250°Cで焼結(磁器化)が始まり、1,300°Cでは溶融し、盃はつぶれてしまう。それ故焼成適温は1,280°C ±10°Cの範囲であり、他の地方の磁器用原石に比べ耐火度が低いといえる。

IV 藤沢焼の種類と特色(写真2~6)

窯跡から出土した無数の陶片からみて、この窯では茶碗、急須、皿を中心に生産していたようだが、どこの窯でも作られている徳利は見付からぬようである。

以下それぞれの器の特色に就いて述べる。

1. 向付 図案化した花の線描き絵付が向付の外側一面にあり、皿の見込に「大化年製」と書かれているもの(写真3)の他、内側に絵付があり、高台に「万延歳製」と書かれた向付も発見されている。

2. 深皿(直径約13cm・高さ約2cm) 「松川之濱」と型押しされ、その上に同じ文字が染付であるもの、「大明清玩年製」「清山瀬樵製之」と入ったもの、唐草に似た文様のもの等がある(写真2)。

3. 急須 窯跡から発見された残欠で、最も多いのは急須のものである。藤沢焼急須には、蓋裏と底にロクロで渦巻きが作られているのが特徴である。吳須で人物、山水、梅、牡丹、菊、竹、蘭、詩(赤壁賦など)その他の文様がつけられ、特に急須と茶碗には銘の入ったものが多い。急須の蓋の絵付も30程に分けられ、つまみは一様に茸形に造られている。また急須の取手と注ぎ口には唐草文に似た絵付がある(写真2)。

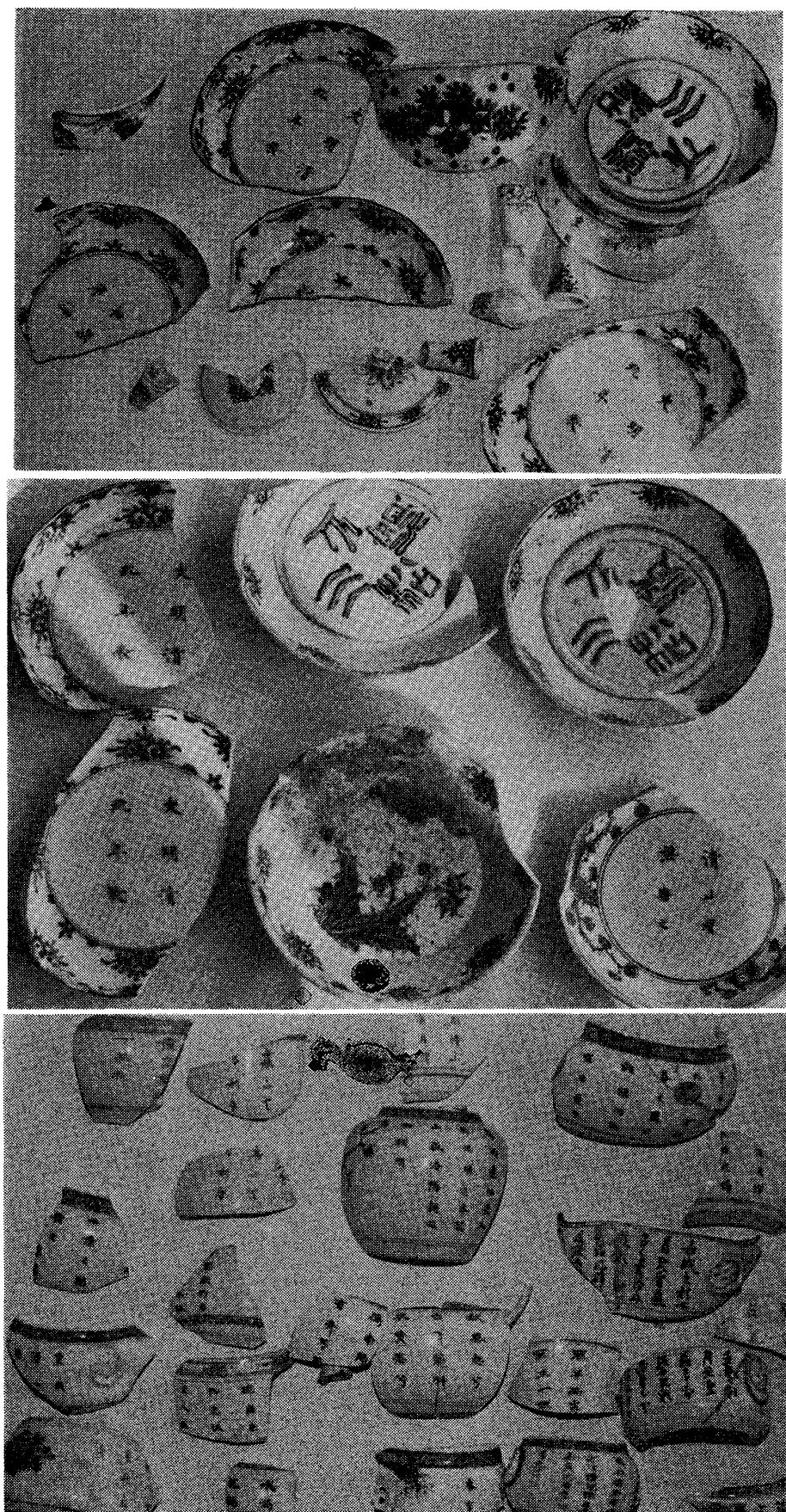


写真2 藤沢焼陶片(1) 上 深皿の縁に藤沢焼でよく見られる唐草に似た文様がかかっている
中 「松川之濱」「清山濱樵製之」「大明清玩年製」と書かれた深皿
下 赤壁之賦などの漢詩の書かれた急須、茶入、茶碗の残欠

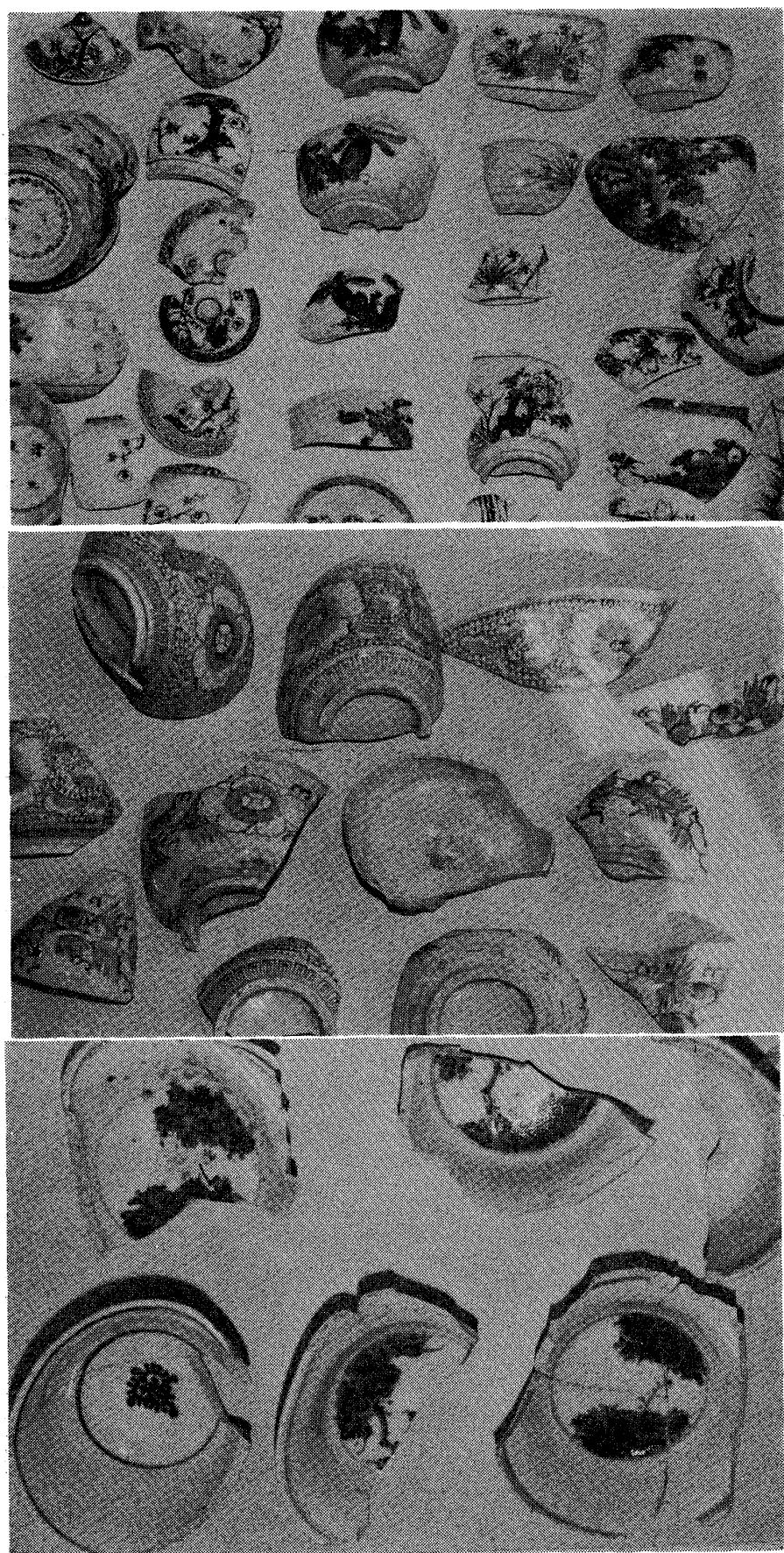


写真3 藤沢焼陶片(2) 上 梅、蘇鉄、ぼたん、らん、竹などの絵付
中 向付 花を中心とした線描で、見込に「大化年製」とある
下 向付 高台に「萬延年製」とある

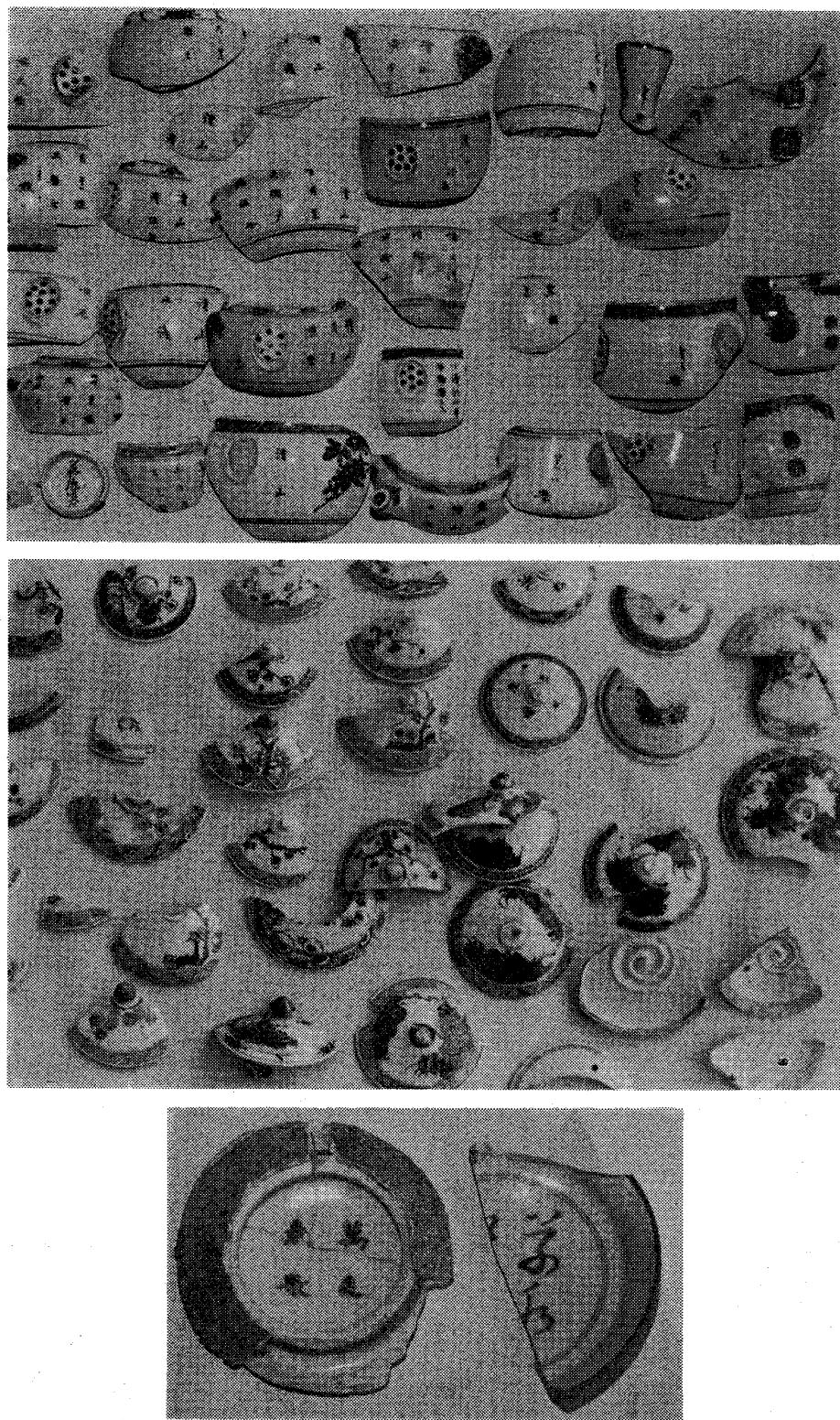


写真4 藤沢焼陶片(3)

- 上 「清山」「樵夫製」「道八」「与三」などの記銘がある急須の胴
中 急須の蓋 つまみが葺形で蓋の裏にうず巻形がある
下 萬延年製と書かれた深皿



写真5 藤沢焼陶片(4)

上 唐人の絵付のある陶片

下 湯飲茶碗残欠

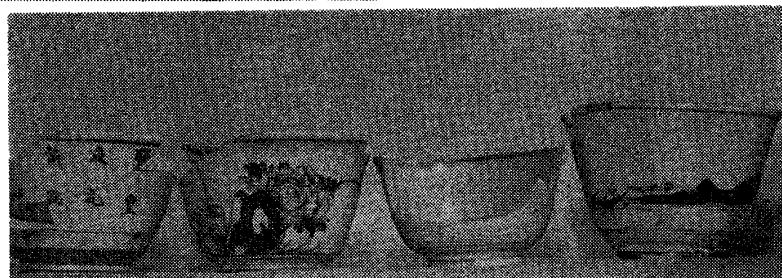


写真6 藤沢焼伝世品

上 藤沢焼酒盃と盃台、
盃台の裏に「以山田三
俣山石造之 於藤沢製
之」とある
(牧和彦氏蔵)下 藤沢焼茶碗
(山崎勝己・黒岩一実
氏蔵)

4. 茶碗及び茶入れ 藤沢焼の伝世品は殆んど茶碗である（写真6）。窯跡から出た陶片も茶碗のものが多い。茶碗には筒型、半筒型のほか浅い湯呑み型があり、高台のけずりも部厚いものと薄手のものがある。

絵付は急須と大同小異で山水、牡丹、蘭、梅、竹、亀、唐獅子、詩等で、いずれも達者な筆致で描かれている（写真3、5）。

茶入れは一定の茶壺型をしており、薄手で特に口クロびきが優れているものが多い。絵付は茶碗と同じである。

上記の器物の他に盃、盃台、薬味入れが知られている。薬味入れの残欠に「ふぢ木 名物戸隠そば即席御料理」と書かれたものがある。この「ふぢ木」は江戸時代より続いた長野市大門町通りのそば屋であるが、このことは藤沢焼が、当時善光寺まで販路を広げていたことを物語り、重要な発見である。

5. 藤沢焼の銘（写真2～4） 前述の皿や深皿に記入されている年号には「万延年製、大化年製、大明清玩年製、永楽年製」がある。一方、製造場所を表わすものとし「松川の濱、藤沢製、藤沢焼」と書かれたものがある。また、急須と茶碗には記銘の入ったものが多く、「清山製、清山製之、清山之濱月道、清山濱樵製之、月道樵夫製之、樵夫製、樵夫製之、与三製、道八製、道八造」等が発見されている。

V 藤沢窯の経営と人物

1. 藤沢龍右衛門 高山村宮村から藤沢に移り酒造りを始めた藤沢辰右衛門から4代目に当る。龍右衛門は少年の頃から学問を好み、酒造のかたわら、椎谷藩の小布施六川役所に仕え、また、奥山田、牧より塾生を集め学問を教えたという。この龍右衛門の招きにより、吉向の弟子の一人、角蔵が藤沢に来て窯を築き藤沢焼を焼いた。

龍右衛門の第二人のうち、すぐ下の東兵衛は山田温泉で現在の藤井荘旅館を開き、その下の弟、英七郎は酒造りのかたわら、磁器の生産、塾生の指導で、兄龍右衛門を助けていたらしい。

然し、時代は明治を迎え、龍右衛門は同4年1月をもって、椎谷藩小布施六川役所も御役御免になり、翌5年8月37才の若さで病没している。

2. 湯本角蔵 角蔵は天保5年（1834）小山村（現在の須坂市小山村）山岸八右衛門の長男として生れた。江戸から吉向が須坂に下った時、角蔵は10才であった。吉向が江戸に帰る年に、角蔵は19才になっているが、この間、何年かを吉向の弟子として、陶芸を学び、吉向が去った後は須坂焼の仕事を従事していた。その後、藤沢龍右衛門に招かれて藤沢焼を始めたのである。角蔵は明治3年、高山村水中の湯本長蔵の養子となり、4人の娘をもうけ、この地で亡くなっている。

3. 松本沖右衛門 湯本角蔵の弟子に沖右衛門がいる。沖右衛門は高山村宮村の藤沢名右衛門の長男である。彼は角蔵の指導のもとで宮村に窯を築き、宮村の赤土粘土を用いて藤沢焼用の練瓦やサヤ等を作り、藤沢窯では角蔵と共に磁器の生産に従事している。沖右衛門窯が築か

れたのは、宮村の「ろくび」地籍に粘土があり、幸いこの場所が沖右衛門の所有地だったことも関係している。沖右衛門は角蔵の片腕として藤沢焼のロクロをひく一方、地元民の要望に応え、宮村の窯で素焼の火鉢、行火、火入れ等を生産しており、現在も宮村、関場に「沖右衛門焼」として残っている。

沖右衛門は後に松本良右衛門（山田温泉で松本屋旅館経営）の養子として入籍し、松本姓を名乗るようになる。

VII 窯跡の埋戻し

昭和55年11月23日に高山村教育委員会は、約40人の人達の参加を得て、窯跡の埋戻しを実施した。その方法は次の通りである（図2）

(1) まず、埋め戻し後の各房の位置識別と作業の際の覆土の均一化をはかるために、窯跡の中央に1列の赤ビニール管、両側に青ビニール管（いずれも長さ60cm、10cm毎に目盛り）を立てた。(2) 窯跡全面を発掘の際ここから掘り出した焼土で1cmの厚さに覆土。(3) その上を細かくした木炭で15~20cmの厚さに覆う。(4) さらにその上を、赤い火山灰土で約40cmの厚さに覆う（黒土は有機物を多く含むので不適当）。(5) 最後にシートをかけ越冬し、春にシートを覆土から1~1.5mにはなし、屋根形にする。(6) 周囲に排水用の溝を掘る。

木炭は吸水性、保温性に富み、変質せず、微生物、モグラ、ネズミなどの侵入を防ぎ、窯跡の表面と覆土の分離にも役立つのである。

VII 考 察

以上、藤沢焼に関する調査結果の概要を述べたが、次の2点に就いての考察を試みたい。

1. 藤沢焼存続の期間 まえおきで述べた通り、この窯の生産期間を示す資料は、現在のところ殆んど知られていない。まず藤沢窯廃絶の時期を検討しよう。窯主の藤沢龍右衛門は明治5年夏、病没しているので、多分、その時期がこれより遅れることはあるまい。そうすると廃窯は明治維新と重なる頃となる。次に創窯の時期は、吉向が須坂を去ったのが嘉永6年（1853）であり、当時角蔵は19才、そしてその後開かれた須坂焼の窯へ移っている。それ故、角蔵が龍右衛門に招かれて藤沢へ来るまでに、何年かが経過している筈である。ここで大層重要な資料として、前述のように、製品の中に「万延年製」と記されたものがあることである。これは一緒に発見される伊万里を真似た「大明成化年製」とは違い、実際の焼成年度を示すと考えてよい。幸い万延は元年（1860）のみで、この時には間違なく窯業が行なわれている。万延元年には龍右衛門23才、角蔵26才であるから、創窯の時期がこれより溯るとは考えにくく、この頃の開窯とみるのが妥当であろう。

ここで再び廃窯の時期に目を転じよう。松本の調査で判明した事実として、慶応2年（1866）4月16日に藤沢窯にとり不幸な事故が発生している。それは池平で白土採掘中に山崩れが起り、2名の犠牲者を出したことである。この事故は当然、藤沢窯に打撃を与えたと考えられ、また一方では、維新の旋風がこの山間にも波及したに違いない。そうすると慶応2年の春

から龍右衛門が御役御免になる間に、廃窯の時期がある筈である。窯跡の土の焼け具合も数年間のものと推測され、上の考察から藤沢窯の寿命は数年から10年に及ばぬ期間と推定されるのである。なお、藤沢窯の生産が思うにまかせなかつたであろうことは、この窯が幕末ぎりぎりから、明治初頭にかけての新しいものでありながら、現存する製品が極端に少ないことと、窯跡から発見された莫大な不良品からも想像できる。これは藤沢窯が須坂焼の磁器とは一味違う、薄手の清水風のかなり高いレベルの磁器の生産を狙った為の必然的な結果なのかもしれない。

2. 藤沢焼の絵付 藤沢窯は須坂焼の窯と異なり磁器専門の窯である。製品は小型の日常雑器で、すべて染付物で、鉄絵も色絵のものもない。この藤沢焼の作行が、時代的にも地理的に最も近い須坂焼のそれと全く相違することは、不可解としか云いようがない。

須坂焼は今まで云われている通り、職人の関係もあり、伊万里によく似ており、徳利にしても大型のものも焼いている。これに対して大半の藤沢焼は、どう見ても江戸末期の清水焼のコピイである。当時の信州の磁器に藤沢焼風の物は全く見当らず、どうしてこの様な作行の磁器が藤沢にのみ存在したかは、信州の陶磁器研究上からも興味深い。

ここで考えられることは、吉向窯の職人達の中に、京都の清水焼の者がいたのではないかということである。若しも、その職人が角蔵と共に藤沢へ来たとすれば、清水風の磁器が現われたとしても不思議ではない。藤沢焼の記銘に就いての項で示したように、ここの焼物のみに清水焼の上手の名が付けられている。例えば「道八」は有名な高橋道八、「与三」は水越与三兵衛であるが、三代道八（華中亭）の没年は明治12年で万延元年には50才、三代与三兵衛は万延元年没であるから、道八の方は藤沢窯の指導の可能性が無い訳ではないが、勿論この高名な陶匠が高山村に足を踏み入れたとの記録も伝承もない。「道八」の記銘の書体は清水のものに似ているが、真似たものであろう。いずれにしても文書も発見されていない今日ではこの程度の考察が限度である。

最後に、本報告を纏めるにあたり、お世話になった、高山村教育長 田中政義、同教育委員会、長野県教育委員会 関孝一、陶芸家 吉向松月、同永見鴻人、須坂高等学校 島田春生、長野県工業試験場、高山村 松本孝夫、黒岩一実、山崎勝己、須坂市 牧和彦の諸氏に衷心より謝意を表する次第である。

参考文献

- (1) 信濃のやきもの 菅平研究会 昭44
- (2) 長野県の陶磁器 安藤裕 民芸手帖 203~205号 昭50
- (3) 信州の焼き物 安藤裕編 信濃毎日新聞社 昭52
- (4) 藤沢窯、沖右衛門窯発見 松本孝夫 みやせき 13号1頁 昭51
- (5) 藤沢焼—窯一人物 松本信義 みやせき 13号2頁 昭51
- (6) 原石採掘地三俣に証明す みやせき 17号1頁 昭52
- (7) 藤沢焼について①、② 松本信義 須高7号 2~7頁 昭52, 10号 44~48頁 昭54
- (8) 藤沢焼原石採掘地発見 松本信義 みやせき 16号1頁 昭52
- (9) 藤沢焼窯跡の発掘決まる 松本信義 みやせき 25号1頁 昭55